

第2講

自分の家の問題は、自分たちで解決してくれ！
— 鎌倉時代の朝幕関係 — (2019 度第 2 問)

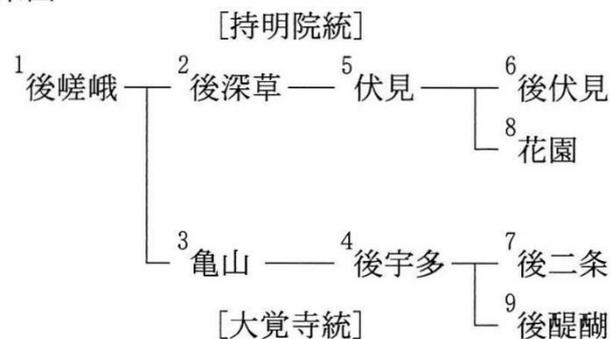
次の(1)～(3)の文章を読んで、下記の設問A・Bに答えなさい。

- (1) 1235 年、隠岐に流されていた後鳥羽上皇の帰京を望む声が朝廷で高まったことをうけ、当時の朝廷を主導していた九条道家は鎌倉幕府に後鳥羽上皇の帰京を提案したが、幕府は拒否した。
- (2) 後嵯峨上皇は、後深草上皇と亀山天皇のどちらが次に院政を行うか決めなかった。そのため、後嵯峨上皇の没後、天皇家は持明院統と大覚寺統に分かれた。
- (3) 持明院統と大覚寺統からはしばしば鎌倉に使者が派遣され、その様子は「競馬のごとし」と言われた。

設問

- A 後鳥羽上皇が隠岐に流される原因となった事件について、その事件がその後の朝廷と幕府の関係に与えた影響にもふれつつ、2行(60字)以内で説明しなさい。
- B 持明院統と大覚寺統の双方から鎌倉に使者が派遣されたのはなぜか。次の系図を参考に、朝廷の側の事情、およびAの事件以後の朝廷と幕府の関係に留意して、3行(90字)以内で述べなさい。

系図



解いてみましょう（第2講）Aについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア **後鳥羽上皇が隠岐に流される原因となった事件** について書く。

イ **事件がその後の朝廷と幕府に与えた影響** にふれつつ書く。

ウ 2行（60字）以内で書く。

2 資料と教科書（山川出版社『詳説日本史B』）の内容とを照らし合わせる。
関係する教科書のページと内容は、

教科書の **101 ページの 18 行目～102 ページの 13 行目**



1221（承久3）年、上皇は、畿内・西国の武士や大寺院の僧兵、さらに北条氏の勢力増大に反発する東国武士の一部をも味方に引き入れて、ついに北条義時追討の兵をあげた。

しかし、上皇側の期待に反して、東国武士の大多数は源頼朝の妻であった北条政子の呼びかけに応じて結集し、戦いにのぞんだ。幕府は、義時の子泰時、弟の時房らの率いる軍を送り京都を攻めた結果、1カ月ののち、戦いは幕府の圧倒的な勝利に終わり、3上皇を配流した。これが承久の乱である。

乱後、幕府は皇位の継承に介入するとともに、京都には新たに六波羅探題をおいて、朝廷を監視し、京都の内外の警備、および西国の統轄に当たさせた。また、上皇方について貴族や武士の所領3000余力所を没収し、戦功のあった御家人らをその地の地頭に任命した。

これによって畿内・西国の荘園・公領にも幕府の力が広くおよぶようになった。朝廷では以後も引き続き幕府の監視下で院政がおこなわれたが、この乱によって、朝廷と幕府との二元的支配の状況は大きくかわり、幕府が優位に立って、皇位の継承や朝廷の政治にも干渉するようになった。

3 与えられた資料をもとに作成した「東大チャート」を解く。

次のページに「東大チャート」があります。上記の「関連する教科書のページと内容」からの抜粋も記されています。

東大チャート 「上級貴族に求められた能力」 (2019年度第2問設問A)

(へは、ほぼ抜き出して入れる。 へは、考えて「決めぜりふ」を入れる。)

(1) 1235年、隠岐に流されていた後鳥羽上皇の帰京を望む声が朝廷で高まったことをうけ、当時の朝廷を主導していた九条道家は鎌倉幕府に後鳥羽上皇の帰京を提案したが、幕府は拒否した。

【教科書の記述】

1221(承久3)年、(後鳥羽)上皇は、畿内・西国の武士や大寺院の僧兵、さらに北条氏の勢力増大に反発する東国武士の一部をも味方に引き入れて、ついに北条義時追討の兵をあげた。(略)戦いは幕府の圧倒的な勝利に終わり、3上皇を配流した。これが承久の乱である。

乱後、幕府は皇位の継承に介入するとともに、京都には新たに六波羅探題をおいて、朝廷を監視し、京都の内外の警備、および西国の統轄に当たさせた。また、上皇方について貴族や武士の所領3000余カ所を没収し、戦功のあった御家人らをその地の地頭に任命した。(略)この乱によって、朝廷と幕府との二元的支配の状況は大きく変わり、幕府が優位に立って、皇位の継承や朝廷の政治にも干渉するようになった。(PP. 101. L18~102. L13)

後鳥羽上皇が隠岐に流される原因となった事件は、 ① 北条義時追討の兵を挙げた

後鳥羽上皇が ② 敗れて 隠岐に流された ③ 承久の乱 である。

この乱の結果、 ④ 幕府 が ⑤ 朝廷 より ⑥ 優位 に立って、 ⑦ 皇位の継承 や ⑧ 朝廷の政治 にも ⑨ 干渉 するようになった。

抜き出したものをまとめる

① 北条義時追討の兵を挙げた 後鳥羽上皇が ② 敗れて 隠岐に流された

③ 承久の乱 の結果、 ④ 幕府 は ⑦ 皇位の継承 や ⑧ 朝廷の政治

にも ⑨ 干渉 するなど、 ⑤ 朝廷 より ⑥ 優位 に立った。



4 60字に要約する。

A 北条義時追討の兵を挙げた後鳥羽上皇が承久の乱で敗れた結果、幕府は皇位継承や朝廷政治に干渉する等、朝廷より優位に立った。(60字)

解いてみましょう（第2講）Bについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア **持明院統と大覚寺統の双方から鎌倉に使者が派遣された理由** を書く。

イ **朝廷の事情** に留意して書く。

ウ **Aの事件以後の朝廷と幕府の関係** に留意して書く。

エ 3行（90字）以内で書く。

2 資料と教科書（山川出版社『詳説日本史B』）の内容とを照らし合わせる。
関係する教科書のページと内容は、

教科書の **120ページの1行目～10行目**



後嵯峨法皇が亡くなると、天皇家は後深草上皇の流れをくむ持明院統と亀山天皇の流れをくむ大覚寺統にわかれて、皇位の継承や院政をおこなう権利、天皇家領荘園の相続などをめぐって争い、ともに鎌倉幕府に働きかけて有利な地位を得ようとしていた。そこで幕府はたびたび調停をおこない、その結果、両統が交代で皇位につく方式（両統迭立）がとられるようになった。

3 与えられた資料と教科書の記述から抜き出して作成した「東大チャート」を解く。

次のページに「東大チャート」があります。上記の「関連する教科書のページと内容」からの抜粋も記されています。

東大チャート「貴族男性はなぜ日記を書いたのか」(2019年度第1問設問B)

(へは、ほぼ抜き出して入れる。へは、考えて「決めぜりふ」を入れる。)

※ 空欄の番号は、Aと同じ語句が入る空欄でも新しく付けられている。

(2) 後嵯峨上皇は、後深草上皇と亀山天皇のどちらが次に院政を行うか決めなかった。そのため、後嵯峨上皇の没後、天皇家は持明院統と大覚寺統に分かれた。

【教科書の記述】

後嵯峨法皇が亡くなると、天皇家は後深草上皇の流れをくむ持明院統と亀山天皇の流れをくむ大覚寺統にわかれて、皇位の継承や院政をおこなう権利、天皇家領荘園の相続などをめぐって争い、ともに鎌倉幕府に働きかけて有利な地位を得ようとしていた。そこで幕府はたびたび調停をおこない、その結果、両統が交代で皇位につく方式(両統迭立)がとられるようになった。(P. 120. L1~10)

(3) 持明院統と大覚寺統からはしばしば鎌倉に使者が派遣され、その様子は「競馬のごとし」と言われた。

持明院統と大覚寺統は、① 皇位の継承 や

② 院政をおこなう権利 , 荘園の相続などをめぐって ③ 争った 。

それに対して幕府は、たびたび ④ 調整 をおこない、⑤ 両統 が交代で皇位につく様式がとられるようになった。

↓

つまり、幕府は ⑤ 両統 が (に) ⑥ 存続できる形で (配慮して) ④ 調整 した。

そのため双方はともに ⑦ 鎌倉幕府に働きかけて有利な地位を得よう として、⑧ 競って 幕府に派遣した。

抜き出したものをまとめる

持明院統と大覚寺統は、① 皇位の継承 や ② 院政を行う権利、荘園の相
続などをめぐって ③ 争った。それに対して幕府は、⑥ 両統 が (に)
⑥ 存続できる形で (配慮して)、しばしば ④ 調整 した。
そのため双方とも ⑦ 鎌倉幕府に働きかけて有利な地位を得よう として、
⑧ 競って 幕府に使者を派遣した。

4 90字に要約する。

B 持明院統と大覚寺統は、皇位の継承や院政を行う権利などをめぐって争った。幕府は両統が存続できる形で調停を行ったため、双方はともに有利な地位を得ようとして、競って幕府に働きかけた。(89字)